

2024 年 美術検定 1 級・論述問題 講評および答案例

※1 級は実践問題 16 点以上（30 点満点）かつ論述問題 70 点以上（100 点満点）で合格です。

<問題>

現代社会において世界的な規模でグローバル化や、さまざまな分野での多様化が進むなかで、お互いの文化に対する理解を深め、全ての人々が歩み寄り、等しく社会生活やコミュニケーションができるようにすることや、障害の有無や国籍、年齢や性別などに関わらず、お互いの違いを認め合って共生していくインクルーシブな社会を目指すことが求められています。

そこで、こうした社会的な観点から今後の美術館のあり方を見据えた取組や方策について、あなた自身の鑑賞経験、あるいは展覧会・美術館での経験に基づきながら、共生の視点に立って具体的に記述してください。

なお、記述にあたり、以下の条件を満たすこと。

- 自身の鑑賞経験、展覧会・美術館での経験を語る視点を明確にして記述すること。
- 解答の文字量構成は、[1-あなたの鑑賞経験について=4割] [2-1の対象の分析に基づく取り組みに必要な事項、根拠など=3割] [3-具体的な取り組み案=3割] を目安とすること。
- 誰が読んでもわかりやすい文章として書くこと。
- 会話調ではなく、通常の書き言葉を使用すること。
- 任意の解答用紙に 1200文字程度*で書くこと。

*指定の文字数の 90～110%程度を一つの基準とします。極端に多い場合、少ない場合は減点の可能性がございますのでご注意ください。

◆出題・採点のポイント

- ① 創造性やオリジナリティ
- ② 自分の経験や深い知識に基づいた具体性・客観性
- ③ 論理的構成力

※その他、記述・提出条件を満たしているかも評価に反映させている

◆全体講評

今回の設問は、自身の鑑賞経験や展覧会・美術館での経験を語ることを通じて、社会における美術文化のあり方と美術館におけるインクルージョンについて考えることを意図して出題したものであり、1級を取得したアートナビゲーターに求められる最新の知識や思考を問うものであった。

生成AIが急速に台頭する中での1級論述問題は、特定の正解がないだけでなく、美術をめぐる最新動向や自身の鑑賞経験など、生成AIに頼り切っているだけでは回答が難しい問題が出題されている。コロナ禍以降、美術館のあり方自体が大きく見直されてきていることも、こうした出題が行われる背景となっていると言えよう。

今回の問題のポイントは、どれだけ他者の立場に立って論を展開できるか、であった。生きづらさを抱える人たちに「何かをしてあげる」のではなく、それをすることでアートナビゲーターである自分が「何を学び、何を受け取るのか」という姿勢、すなわち、共生の視点をもって論述されているか、という点を重視して評価した。

以下、出題の主旨を踏まえて解答できていた具体例を示す。答案1は、各地で開催された展覧会から西欧中心・男性中心の美術史が問い直される動向を捉え、美術館は「人への思い」を感じさせる場であるべきとの主張につなげている。答案2は、自身の妊娠・出産により美術館においてマイノリティな立場になった経験から、美術館のインクルーシブな方策をハード面・ソフト面から提案している。答案3は、東京ディズニーランドや対話型鑑賞の事例をもとに空間と活動の両面から提言を行っており、「インクルーシブとは未来への希望を探る行動」であるとされている。いずれも、自身の経験や深い知識に基づき共生の視点から論じることができている解答であった。

◆答案例

答案 1

インクルーシブな社会とは、個々の多様なニーズや権利を尊重して全ての人が平等に暮らせる社会のことである。国際博物館会議（ICOM）の定義によると、美術館は「多様性と包括性がある場を提供すること」※1が求められている。国立アトリサートセンター（以下、NCAR と省略）の「合理的配慮のハンドブック」（2024年発行）を参照すると、バリアフリー、ジェンダーフリー、多国籍等を配慮して、多様なニーズや権利を尊重し、全ての人が平等に楽しめる場所を提供すべき、としている。私にとって、スロープの設置や点字ブロックなど物理的な環境が整っているだけでなく、多様性に配慮した「人への思い」を感じる美術館が理想である。

近年リニューアルした美術館では、バリアフリーの取組みが進んでいる場合も多い。例えば根津美術館では、庭園案内図に車椅子のルートが赤く示され、一般の人々とバリアフリーが調和している。また NCAR の「DEAI 調査レポート」では、2024年4月より義務化された「合理的配慮」への対応例が報告されている。私自身が重度・重複障害者施設の職員で、施設見学の際に大きな車椅子に対応できないエレベーターや、外出先で医療処置をする部屋等に苦慮した経験があり、前述のレポートに対して共感しながら読んだ。

一方、ジェンダーについて美術史で捉えたと、男性は絵を描く側、女性は描かれる側が多かったが、埼玉県立近代美術館の「美男におわす」展は、女性の「美人画」を逆転させた「美男画」を中心に据え、今までの美術史に一石を投じるものだった。また近年は女性作家の特別展も増え、白井美穂「森の空き地」展（府中市美術館）では、循環や境界線の観念が頻繁に登場し、関係性が反転する不思議な世界を描いていた。「大きな社会的事件や女性差別の経験にも影響された」、「権力関係が作品のフレームの背後にあることを、観客に気づかせたい」※2という作家の思いを知り、深く考えさせられた。ブラックアートでは、「シアスター・ゲイツ展：アフロ民藝」（森美術館）が印象的だった。黒人の文化的アイデンティティをめぐる闘いではなく、異なる多様な文化が融合した作品で、《みんなで酒を飲もう》の徳利や、《ハウスバーグ》で回転するミラーボールの光と音楽は、作家の遊び心や異文化を受け入れる柔軟性を感じた。国立西洋美術館の「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」では、田中功起の「美術館への提案」自体が作品となっている展示に注目した。彼は展示が「成人の目線を意識され、子供や車椅子の人々には見づらいのでは？」と改善の提案していた※3。後日、国立西洋美術館の所蔵品展で、以前とは違う低い位置で展示されている作品が数点あることに気づき、これが美術館の「合理的配慮」だと感じた。

私は今後の美術館に対して、多様性に配慮した「人への思い」が感じられる施設を思い描く。展示の動線上に途中で休めるベンチがあり、キャプションの多言語化があり、スタッフが館内を巡回して困っ

ている人への声かけを行う。美術館は、どんな鑑賞者も自由に楽しむことができるようなサポートをし、作品を楽しむだけでなく、「人への思い」を感じられる場所であって欲しい。

【引用文献】

※1 2022年 国際博物館会議(ICOM)が採択した博物館定義。「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。」を参照し、書き換えたもの

※2 美術手帳『世界のアーティスト2024「多様性の時代」のコンテンポラリーアート』2024.04号 P,234~241

※3 田中功起《いくつかの提案：美術館のインフラストラクチャー》(2024年)、「美術館へのプロポーザル1：作品を展示する位置を車椅子／子ども目線にする」を参照し、書き換えた。同作が展示されたのは、国立西洋美術館開催の展覧会「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？—国立西洋美術館65年目の自問—現代美術家たちへの問いかけ」(2024年)

答案2

私は昨年、妊娠・出産をしてから、インクルーシヴ社会について考えるようになった。インクルーシヴの対義語は、「エクスクルーシヴ……『排除的な、排他的な』という意味」※1だが、マイノリティな立場になったことで、美術館で“暗黙の排除”ともいえる経験をしたからだ。例えば妊娠中に訪れた展覧会では、混みあう長い展示ルートなのに椅子がほぼなく、重いお腹を抱え貧血気味の身にはとても辛かった。出産後も、多くの美術館ではオムツ台は多目的トイレ1か所のみで授乳室もなく、足は遠のいた。

一方で、インクルーシヴな試みのありがたさも痛感した。今年東京都庭園美術館で開かれた「ベビーアワー」だ。臨時スロープの対応でベビーカーでも鑑賞でき、複数台のオムツ台や授乳室もあった。さらに、美術館デビューした娘の写真を撮っていたら「お母さんも一緒に」とスタッフの方が声をかけてくださり、心遣いに感動した。その後、国立西洋美術館の「ゆったり BABY DAY」と東京国立博物館の「あそびばとーはく！」にも参加。どちらも臨時授乳室があった上、前者は再入場可能で娘の機嫌に応じて鑑賞でき、後者は乳幼児向けの体験が豊富で、娘自身も嬉しそうだった。

先進的な3館で共通していたのは、設備の“ハード面”とスタッフや周囲の鑑賞者の温かい対応という“ソフト面”の両方のケアがあったことだ。ハード面は、ほかの美術館でも「対話のある『合理的配慮』」※2による実現が検討できる。ソフト面は工夫次第ですぐ取り組める。子連れ鑑賞をテーマにしたアンケートでも、「無言無音であれという圧力」※3等の変化をのぞむ声は多い。

インクルーシヴな取組みを検討する際は、多様な子どもたちの存在も大切にしたい。「全国の医療的ケア児(在宅)は、約2万人(推計)」※4と増えており、近隣の子育てイベントでも保護者や介助者と

大型車椅子で参加する子どもは珍しくない。また、私の住む東京都では直近1年間の人口増加で「外国人が……増加分の9割以上を占め」※5、公園でも外国語を話す子どもが多い。

本来、インクルーシヴ社会での美術館のあり方を考えるには多彩な立場の視点が必要である。しかし、今回は妊娠や子育てで得た経験から方策を示す。

①【多様な人が利用しやすい環境を整える（ハード面）】

臨時授乳室の設置や空き部屋の活用／大型車椅子ユーザーの搬入用エレベーター利用／企画展の途中退出・再入場／展示室内の一時休憩場所の設置／多彩な言語に対応した音声ガイド／子どもや車椅子ユーザーも見やすい高さの展示

②【多様な人がより楽しめる空間をつくる（ソフト面）】

監視員や警備員を含めた関係者の意識改革／会話歓迎を伝えるパネルを入口に立てる、バックミュージックをかけるなど、子どもや介助者との会話がしやすい雰囲気作り／五感で体験できるワークショップ

③【インクルーシヴ社会実現に向けた考え方のヒントを提供する】

子どもや若者、LGBT当事者や多国籍にルーツをもつ人など幅広い立場のアーティストの紹介
私は今後の美術館は、もっと多様な子どもたちとその養育者や保護者に開かれた、敷居の低い場所になるべきだと考える。

【引用文献】

※1 講談社ライツ・メディアビジネス本部メディアプラットフォーム部「インクルーシブとは？ 社会を包み込む理念からSDGsの実現へ | SDGsにまつわる重要キーワード解説」講談社SDGs by C-station、2023年01月13日付

<https://sdgs.kodansha.co.jp/news/knowledge/42229/>

※2 鈴木智香子、伊東俊祐「ミュージアムの事例から知る！学ぶ！合理的配慮のハンドブック」独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター、2024年、p.6-7

※3 永田晶子・福島夏子・野路千晶執筆「【子連れ美術鑑賞についてのアンケート】の結果を発表！TABに寄せられた701人の声から子供とミュージアムのリアルに迫る」TOKYO ART BEAT、2024年5月21日付

<https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/museums-with-children-202405>

※4 厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 障害児・発達障害者支援室 「医療的ケア児支援センター等の状況について」厚生労働省、2022年9月30日付、p.2

<https://www.mhlw.go.jp/content/12204500/000995726.pdf>

※5 東京都政策部政策調査課「人口減少問題に関するファクトシート」東京都、2024年10月23日付、p.6

答案3

共生とは「一緒にいること」が目的ではなく、同じ空間や対象を前にそれぞれの利益を十分に享受できることだと私は考える。美術館ではないが、以前の東京ディズニーランド（以下TDL）は老若男女・車椅子ユーザー・外国人と多様な人がアクセスし行き交いながらそれぞれ充実した時間を過ごせるインクルーシブな王国であったと思う。

例えば、TDLの道は平坦で広く見通しが良く移動にストレスが少ない。おおよその美術館も同様であるが、以前訪問したマルタ国立コミュニティ美術館は展示作品の間の動線が狭く、東京オペラシティアートギャラリーの「宇野亞喜良」展では、展示作品の数と鑑賞する空間のバランスが悪く、ともに車椅子ユーザーにストレスを強いる環境ではないかと感じた。このことから、今後の展覧会では①**鑑賞スペースの確保も展示作品や資料の点数と同等に重要視すべき**だと考える。会場デザインの視点で考えると、富裕層向けの広告等が余白を大切にするように、鑑賞スペースを広く確保することで、鑑賞者の心にも余白が生まれると良い。

都心部の美術館でスペースの確保が難しい場合は、通常開館の前後に車椅子ユーザーやベビーカーユーザーの②**プライオリティ鑑賞**を設けるのはどうだろうか。マラソンで車椅子選手と一般選手のスタートに時差をつけるのと同じで、それぞれが遠慮なく鑑賞できる環境を提供することが目的で、区別を推奨する考えではない。開館時にはプライオリティ鑑賞者と一般鑑賞者がグラデーションを描きながら混ざり合っていく様子を思い描いている。それぞれの来館者の満足度を上げ、再訪への意欲を掻き立てたい。

次に提案したいのは、美術館のアナログ的機能の維持である。私が初めて対話型鑑賞に参加した時、「崇高な絵に違いない」と思い込んでいた《ソクラテスの死》を「飲み会みたいだ」と言った人がいた。この経験は視点が180度変わるほど衝撃的で、「見る」と対話が生み出す絵画の奥行きを味わった瞬間だった。このことから美術館は、「見る」「話す」場所としてもっとアナログに徹する空間でよいと思うようになった。例えば、③**「緑の服Day」**を設定し、参加者に制限を設けず、鑑賞しながら誰かと対話したい人は緑を基調とした服装で来館してもらう。それを目印に「緑のお洋服が素敵ですね」の声掛けから対話するパートナーを見つけてもらうのもいいだろう。

最後に「見る」施策として、④**グラフィックレコーディング（以下、グラレコ）を活用して美術館の動きを可視化**する取組みを提案する。例えば共生をテーマにディスカッションした内容をグラレコでまとめ公開することで子供から大人、外国人にも興味をもって見てもらえるだろう。

冒頭にかつてのTDLを共生の理想郷のように書いたが、園内アプリの導入により、今では中高年が置いてきぼりにされ、もはやインクルーシブとは言い難い状況にある。共生が崩壊した例といえよう。だからこそ、美術館はアナログに徹するという視点を取り入れ、経費や負荷が抑えられる提案を考えた。

「インクルーシブな社会」とは言葉が独り歩きしているような理想郷ではないかと私は批判的に考えていた。しかし、企業、学校、美術館の取り組みを知ると、未来への希望を探る行動なのだと捉え方が変わった。それは、対話型鑑賞を初めて体験した時の感覚にとっても良く似ていた。ああ、今すぐく誰かと話したい。